オリカルクムの記憶

四　奇人と呼ばれた男

峯村　明

オリカルクムの記憶 4

登場人物

奇人と呼ばれた男

029.

030.

031.

032.

033.

034.

035.

036.

037.

あとがき

奥付

登場人物

竜門渕　めるの	湖畔の旧家、竜門渕家の後継者　１５歳
竜門渕　遠野	竜門渕家の現在の当主　めるのの曽祖母
河合　保ノ助	湖畔の温泉宿『かわいや』のせがれ　１４歳
かわいや	温泉宿『かわいや』の亭主
A.V.ラウレンス	ベルギー人の鉱物学者
おシゲ ／　源三	竜門渕家の使用人
星名　千介	アマチュアの鉱物学者

奇人と呼ばれた男

029.

　病棟の廊下を歩きながら、ラウレンス氏は前を歩いていく職員に「星名さんのお加減はどんなでしょう？」と声をかけた。男性職員はちょっと振り向いて、また前を向き、言葉少なく応えた。「今日は……ちょっとすぐれないようです」

　ふたりは顔を見合わせる。男性職員が取り次ぎにいって戻ってくるあいだ、かなり待たされた。夕方だからか閑散とした雰囲気があるが、ひょっとしたら職員は忙しい時間帯だったかもしれない。それとも、星名氏本人の加減が、本当にすぐれないのかもしれない。
　尋ねてみたいが、白いワイシャツを着た男性職員の背中は無表情で、足は速く、それ以上声をかけることができなかった。

　病室の前まで来ると、こちらです、と職員は白い引き戸を手で示し、「お帰りになる時は受付にひとこと……」とだけ言って、軽く頭を下げて廊下を戻って行ってしまった。ふたりはなんとなくその背中を見送り、氏は気を取り直して戸を軽くたたいた。

　薄暗い病室で、星名氏は枕に頭をつけ、顔を窓の方に向けていた。白いカーテンが引かれた窓。
「失礼……」と、ラウレンス氏はつぶやくように言った。

「……申し訳ないが」としゃがれた声が返ってきた。「光がまぶしくてたまらんので、

部屋を暗くしてある。体調もすぐれぬゆえ、寝たままで、ご勘弁ねがいたい……」

「こちらこそ。ご都合も確めず押しかけてまいりました。どうかお許しください」

「アルベルト・フォン・ラウレンス博士……王立リェージュ大学の……」

「私をご存知でしたか」

「何年か前、東京へ出向いた折り、論文を読ませていただいた。日本語に訳されたものを」

「それは……」とラウレンス氏は声を詰まらせた。「光栄なことです」

　すると、星名千介ははやおら頭を持ち上げた。そして体を起こそうと手をあがかせたが、やがて力つきて、後頭部の扁平な頭は枕に戻った。ラウレンス氏はそれをじっと見ていた。

　星名千介は「はああ」と息をつき、こちら側を向いた。初めてその顔をみた保ノ助は思わずぎょっとした。額も頬骨も高く、落ち窪んだ目。瞳に白く膜がかかっている。

「あんたは」と星名千介はしゃがれた声で激しく言った。「本物の学者だ。一流の学校で一流の教師について学び、研究を納め、こんな極東の田舎者が名を知っている、本物の学者だ。そのような男が何しに来た！？　おれの奇人ぶりを笑いに来たのか！？」

030.

　保ノ助は思わずも、かっと頭に血がのぼるやら、あぜんとするやら、である。親父もわけのわからないことを喚いて当り散らす、面倒なところがあるが、そこは父と息子、他人ではない。しかし、初対面の赤の他人にいきなり文句を言われるとは思わなかった。
反射的に、なに言ってやがる！！　と、色めきたつ保ノ助をラウレンス博士は後ろ手にそっと制した。

「――たしかに、いろいろな人があなたのことを変人だ奇人だというので、正直なところ、ちょっぴり興味をそそられました。しかし。私の目的はそういうことではありません。鉱物学者としてのあなたに、お目にかかりたかった」

「鉱物学者――？　おれが？　そんなものは嘘っぱちだ。おれはそんなものではない。すまんが帰ってくれ。気分がわるい」

　千介はぶっきらぼうに言い、ぷいっと向こうを向いてしまった。
　気分がわるいのはこっちの方だ、先生、帰ろうよ、と保ノ助はラウレンス氏の袖を後ろから引いた。けれども、彼は動かなかった。

「では、なぜ私をここまで通したのですか。私は嘘偽りのない職業を名乗り、名を名乗った。あなたは私を知っていた。あなたは鉱物学者としてではなく、奇人として私を知っていた、とでもいうのですか？」

「な……なにをぉぉ」

「せ、せんせいぃぃ」

　保ノ助は白く濁った目を不穏に光らせている千介を見て怖気づいてしまった。だいたい千介は、竜門渕のばあさまとまではいかないが、かなりの老人だ。老人は頭固いし怒らせると怖いし、面倒なだけじゃねえか。ラウレンス先生、たのむ、もうやめてくれよ、おれ、おっかねえよー、ころされちゃうよおお。
保ノ助はついに半べそをかいて氏の背広のすそをけんめいに引っ張った。しかし、彼はなお果敢にたたみかける。

「星名さん。あなたの目はまったく見えないのですか？」

「き、きさまー」と星名千介はおそろしいうなり声をあげた。空腹の熊でもこんなうなり声は出すまいというほどの、地鳴りのようなおそろしさである。

031.

　ラウレンス博士はいつ取りだしたのか、例の日本土産の箱を手にしていた。目はじっと千介を見据えたまま、片手で蓋をとって指先でさっとさぐり、一個の石をつまみ上げる。そして、すいっと千介の目の前にかざした。

「どうです？　見えますか？」

「な……なんだ！　……石？」
　千介は、と、顔つきを変え、そろそろと手をもちあげた。寝間着のそでから出ている腕はやせ、血管が浮き上がっている。

　博士は一歩前に出て寝台に箱を置き、千介の震える大きな手の下に自分の手を添え、千介の手のひらにそっと石を置いた。
千介は全体を包むように一度握り、それから五本の指をすべて使って石を観察した。硬さ、滑らかさ、凹凸の具合、重さ、などを。
「色は！？　どんな色だ！？」

　透き通る黒い石を見ようと目を動かした瞬間。博士は自分の失態に気がついた。そう、黒曜石を千介に握らせるつもりだった。博士にとっても千介にとっても、それ以上に興味を持てる石があろうはずがなかったから。ベルギーから日本へ、そして星名千介の元へと誘ったのは、その黒い石だったのだから。ところが。
何をどう誤ったのか。博士の手探りは肝心の石の、隣の石をつまみ上げていた。色も形も、どうという、特徴のない石だった。ただ、手触りが黒曜石の冷たい滑らかさと少しばかり似ていた。しかし、間違えましたと、言い出せなかった。ラウレンス博士は言葉を呑み込んだ。星名千介の手指は夢中になってその石をまさぐり、観察していたのである。

「ほとんど白に近い灰色、若干、黄色がかっています。どうです？」

「白に近い灰色、若干、黄色がかっている……滑らかで、重い……気のせい、あるいは病み衰えたせいか」

「たくさんのサンプルを手にとって触り、比べてみなければわからない程度の微妙な重さです。気のせいでも病気のせいでもない。あなたにはちゃんとわかるのですよ」ラウレンス博士はとっさに千介にそう、応えた。

　千介は目を見開き、懸命に見ようとしていた。もともと薄暗かった病室は、日没でさらに暗くなっていた。千介はついに見ることをあきらめ、疲れたようにまぶたを閉じた。

「結晶面はないか？」
「ありません。岩石様のものです」
「そうか……ひょっとして、ホクトライト――？」
「なんですかそれ？　石の名前？」
「西洋人が知らないのも無理はない。二十年ばかり前に台湾で発見されてホクトライトと名づけられた。名づけ親はおれの師、神保先生。帝大に標本がある。いや――やはり――それとは違うようだ――」

　ラウレンス博士は石を千介に持たせ、自分はせっせとノートをとっている。

「この石、発見場所はどこだ？　ヨーロッパのどこかか？　誰が見つけた？」
「水つ早湖からすくいあげたようです。見つけたのは水つ早町の尾川商店のご主人」

　その言葉を飲み込むのに、千介は相当時間を要した。宙を見上げたままぽかんと口をあけ、息をするのも忘れていた。やがて彼は激しく口を切った。

「そんなばかな！！　あの湖から古い石器が発見されて帝大から考古学者や人類学者がやってきて湖をさらった時、おれは学者たちの助手を勤めた。あがった石はおれがかたっぱしから目を通して分類した！　変わった石があれば、気がついたはずだ！！」

　博士は「ふむ」と鼻をならした。
（変わった石……？　いわれてみれば見た目は砂岩に似ている。手触りはチャートに似ている……）
（どうという事のない平凡さが、黒曜石や、ザクロ石や、石英のきらめきの華やかさに埋もれてしまった……？）

「研究者の目をすり抜けてしまった、ということかもしれませんね。その石はほかの石と八個１セットでみやげ物として売られ、ツルガ港から船に乗り、私の手元に」

「尾川～」と、千介はうなった。並びの不ぞろいな歯で歯ぎしりまでしている。「ばかもの～～、おれの目をちょろまかすとは～～！　今度会ったらただではおかん～～！！」
「尾川さんにはもう会えませんよ。ずいぶん前にお亡くなりになってます」
「――死んだ……？」
「ええ。ですから、あなたがいっしょに仕事されていたと聞いて、私はこうして」

「いっしょに仕事などしとらん！！　おれは研究者でやつはごうつく張りの収集家だ！　貴重な研究資料を売り物にしおって！！

032.

「まあまあ」とラウレンス博士は千介をなだめた。「ふつうに生活している人にとって、石の見分けはむずかしいものです」

「だ、だからといって、う、売ってしまうとは！！」

「あなたのお怒りはよくわかりますよ、私も幾度か同じ目に遭ってますから。それはともかく、星名さん、その石は、いったいなんでしょう？」

「――わからん」

「無数の石をさわってきたあなたにも、ですか？」

「――なんでそんなことを知っている」

「地元をくまなく歩いて鉱物を採集し、分類しスケッチしデータを作り、標本にして県内の学校、博物館はいうまでもなく、帝大に寄贈し皇室に献上している。そんなことは、ちょっと調べればわかります。あなたの目の病気は長年の緻密にして微細な作業の結果でしょう」

「……ふん。しかし……そんなことは……」

「なぜ、そんなこと、なのですか。あなたの師、神保博士はあなたの仕事を絶賛しておられるのに」

「……あんたみたいな正統の学者にはわからん。おれは鉱物学に必要な高等数学という

ものを修めとらん。学校へ行く金もなかった。どんなに無数の石をさわろうが、くそ細かい資料を作ろうが、それだけのことだ、神保先生は、素人にしては、と褒めてくださっただけだ……」

　役場の野村係長が言っていた。「星名は学者に会いたがらないかもしれない」、と。
　また、彼は知ってるかもしれない、とラウレンス博士は思う。彼があちこちに寄贈した標本が、あまりに緻密な作りで、あまりに膨大な量である故に、かえって煙たがられ、すでにあちこちの物置でほこりをかぶっているということを。彼が児童に惜しまれながら学校長を退任したのはその仕事に専念したかったからだというのに。

「私は、そうは思いません」という自分の声を博士はむなしく聞いた。千介はすでにそっぽを向いている。

　とんとん、と、引き戸をたたく音がして、からからと戸が開いた。顔をのぞかせたのは、病室まで案内してくれたあの、若い男性職員だった。彼は「そろそろ夕食の時間です」とだけ、事務的に告げ、戸を開けたまま立っている。面会はもう遠慮してくれということらしい。

　博士はしかたなく、イスから立ち上がった。そして、「星名さん」と呼ぶ。「明日、またお話しましょう」

　外国人の学者と連れの少年、男性職員が病室を出て行き、誰もいなくなった。開いた窓の外、遠くカラスの鳴き声がわびしい。
千介は手の中に残っている石に気づいて、うまく動かない右腕をふるって思うさま壁に

投げつけようとした。壁にあたって粉々に砕ける様をまざまざと思い描いて、ほとんど見えない目をきつくつむり、握りしめた手を広げ、ふたたび握りしめた。

033.

　ラウレンス博士の後ろからついて歩きながら、保ノ助は思った。あの偏屈じじいは例の石について、なにもわからねえ、と言うし、もうここには用がねえじゃねえか。明日も話そうだなんて、気がしれねえや！　話したければ先生だけで行けばいい、おれは外で待ってるからさ。
　けど、先生はなんでこんな切なそうなんだろう。そりゃまあ、あんなに怒りっぽい偏屈じじいの相手は、はたで見てたおれだってうんざりしたもんな……

　時折きしむ木の廊下を黙々と歩いて玄関にたどりつくと、先導の男子職員がちらと振り向いた。
　彼は「ここでしばらくお待ちを」と言って、玄関脇の受付の出入り口から中へ入って行き、すぐに出てきた。手に小さな風呂敷包みと書類かばん。中へ向かって「では、お先に」と、声をかけ、博士に軽く会釈して言った。「まいりましょう」

　博士はきょとん、と男性職員を見、保ノ助を見た。早々に追い出されるんだろうと思って若干気ぜわしい思いで彼の後を追うように、玄関まで来た。男性職員はどこへ行こうというのか、意味がわからない。保ノ助も同じように感じたらしく、やはり博士を見、男性職員を見た。

　男性職員はもうそこにはおらず、玄関のすのこに立っていて、下駄箱から博士の革靴をとり、粗い石のタイルの上に揃えて置いた。続けて保ノ助のわらじも下駄箱からとろうとしているので、保ノ助はあわて、自分でやりますんで、と言った。

　履物を履き終えたふたりが玄関から出ると、くだんの男性職員は空を見上げていた。細く白い三日月が出ている。

「うちまで、ごいっしょするように、云われてまして」と、彼は言い、ふたりを促して歩き出した。

「はあ……うち、とおっしゃいますと？」

「昼間、父から電話がありました。星名さんを訪ねていく人がいるからよろしく頼む、と」

「あ……」

「役場の野村は私の父です」
　野村係長の息子、憲吾氏は、療養所の事務職員だった。その伝（つて）で彼の父は、幼なじみの星名千介を入院させたのだった。

　一行は言葉少なくなだらかな山道をくだって行った。

　ふもとの野村家に帰着した憲吾氏は、さっそく父に「星名先生はお客と面会して、長いこと話してた」と報告し、父親は幾度か小さくうなずき、「そうか」と顔をほころばせた。明日も会いに行くのだと知ると、父親は、えっ、と驚いた。

「アレは年々偏屈になっていくばっかりで、人には会いたがらんのに！　わしが面会に行っても『こんなとこに放り込んだひとでなしは友だちでもなんでもない！』とか喚いて、この前なんか吸飲みを投げつけられただに！」

　彼は、そおかあ、としきりに感心して、やがてつぶやいた。「さびしいだなあ。やっぱり」

034.

　翌朝、いやがる保ノ助をなだめすかし、ラウレンス博士はふたたび千介を訪れた。
「また来たか！！」と、吸飲みが飛んでくるのを覚悟して。

　千介は寝台の上で体を起こしていた。背中に畳んだ掛け布団と枕をかい、体が倒れないようにして。

「――おはようございます」と、ラウレンス博士がおそるおそる戸口から挨拶すると、千介は鷹揚にうなずき、「うむ」と応えた。

「――お加減はいかがですか」

「うむ、よい加減だ。昨夜は珍しくぐっすりと眠れた。ところで」

「は、はい」

「この石だが」
　昨日の石は窓の桟に置かれていた。そこはカーテンが引かれているが午前の日が当たる場所で、石は日向ぼっこをしているように見えた。
「昨日、あんたが帰ったあと、ゆっくりと語り合ってみた。しかし、残念だが、わしにはようわからん」
　ようわからん、と言うわりに、千介はごつごつと痩せた面に、なぜか透明な表情を浮かべていた。「あんたはこの石、水つ早湖からすくいあげられたものだといったが、これはこの辺の石ではない」

　ラウレンス博士は、あ然、と千介を見た。「今、語り合った、とおっしゃいましたか？？」

「うむ。こいつ本人が言った。自分の故郷はとても遠い所だ、ということを」
　怒りやら苛立ちやらをむき出しにした昨日とは打って変わって、千介の表情は透明だった。嘘や冗談、はぐらかしを言っている表情ではなく、いたって正気のものだった。

「……石が、しゃべった、と？」

「べつに、気がふれたわけではないぞ、おれは子どものころからそういうことができた。誰でもそうなのだと思い、不思議とも思わず大きうなったが、どうも他人には理解できないらしい。しまいには奇人扱いされる始末で。ま、それはどうでもいい。

　なあ、あんた。この辺一帯は、遺跡が多い。いったいいつごろから人が住んでいたのかしらんが、良質な黒曜石の原石があちこちにごろごろしてるからおそらくそれ目当てにやってきたのだろう。原石を加工していた工房らしきものもあちこちから見つかってる。水つ早湖の底にあるのもそのひとつだ。場所が湖底だったんで新聞が仰々しく書きたてたが、地すべりかなにかで水底に沈んだというだけで、あそこは単に加工工房のひとつだ。たまたま竜門渕先生のとこに寄らせてもらってるときに、大発見だ、って騒ぎが持ち上がったもんで、おれはすぐさま駆けつけて発掘の手伝いを申し出た。なかなかそんな機会はないからな。
　だから、あの湖底からすくい上げた石は、ほとんど一からおれが目を通し、片っ端から触れてみた。水つ早湖底に沈んでいる石は、九分九厘、原産地はこのあたりだった」

「――そんなことが――わかるのですか――」

「わかる。石というのはひじょうに、身の上がはっきりとわかる。どこから来たのか、

ということが刻み込まれているといおうか」

　ラウレンス博士は薄茶色の目を見開き、口を半開きにして千介の話に聞き入っていた。書きとめようと手帳を開いていたが、手はまったく動いていなかった。

「あなたは――」

「おお。おれは奇人だ。奇人のいうことを信じろとはいわん。聞きたくなければ帰ればいいだけの話」

「いえ――」博士の喉仏がごくりと動くのを、保ノ助は見た。

035.

「水つ早湖底の石の九割はこの近辺のものだ。しかしどうにもわからんものがあった。一見、なんの変哲もない石ばかりで、東京から見にきた学者の先生たちは見向きもしなかった。おれはあとでゆっくり調べなおそう、と思い、そういうのを脇にどけておいたのだが……」

「それをどうされました！？」

「水つ早湖からうちへ運ぶ間に、雨に降られてな、ぬめった峠道で荷車がひっくり返り、谷側へばらまいてしまった。昨日、あんたが来て、帰るまで、すっかり忘れていた」

「――行方不明」

「そういうことだ。尾川の田子作はおれがやることをはたで逐一見てたから、なにか価値があるものだと思い込んでちょろまかしたのかもしれん。あのばかたれが！」

「まあまあ。ですが、その尾川さんのおかげで、一個だけ、こうして私のところへ辿り着いたのですよ」

　ふん、と鼻をならして千介は窓辺においた石を手にとった。

「それにしても、あんたはなんでこんなものに目をつけたのだ？」

「勘、です」

「勘だと？」

「鉱物に対する第六感のようなものです。この石にはなにか特別なものがある。ひと目見て、なにがなんでも出自をつきとめなければならない、水つ早町という所へ行かなくては、と、猛烈にそう思いました」

　言うまでもないが、もう口から出まかせである。

「あんたも変わってるな」

「ははは。星名さん、あなたは、この石の故郷はとても遠い所だ、とおっしゃった。それはどこだと思われますか？」

「まさかとは思うが……日本のものではないかもしれん……あるいは……」

「……あるいは？」

「遠いのは場所ではなく、時間かもしれん」

　時間……と、ラウレンス博士はつぶやいた。

036.

　ラウレンス博士はノートをとることを完全に忘れ、ひたすら千介の表情を見ていた。
　こいつらは黒曜石に比べたらまるで寝ぼけている感じだ、うとうとしながら寝言を言っているような印象を受ける、と千介は言った。

「こいつらは、老人か死人なのではないか。地表にあれば風化して砂になり塵になって消えていくものを、水中に在った故に形をとどめていたのだろう」

「……」

「水つ早湖周辺には古い遺跡が点在する。一万年も二万年も前のものらしい。そのころから人が住みついていたのだ。黒曜石を加工したそういった人間たちの子孫かどうかはまったくわからんが、この土地には古い民間伝承や古い土着の神さまが山ほど残っている。公式の神話なんてのもある。そういうのが、混然とある。あちこちの神社だの拝殿だのがそうだ。

　おれは神さまの話というのはどうにも苦手でな。科学というものの方が性にあっていた。だから、水つ早湖の底の遺跡にはとてつもなく興奮させられたが、おそらく、全容はわからんだろうと当初から感じていた。どういうことか、って？　湖底の遺跡を発掘するには、とにかく湖の水を抜かねばならん。それには相当な費用がかかって、現実的に難しいということと、それとな、あの湖は、私有地なのだ」

　私有地？　とラウレンス博士はオウム返しに尋ねた。

「竜門渕家の私有地なのだ。だから水の上から底をさらうのはいくらやってもかまわん

が、水を抜くことには応じかねる、竜門渕のばあさまは当初からそうおっしゃっていた」

「……」

「竜門渕家は水つ早湖そのものをご神体とする、水神の末裔だ。あの家には文書（もんじょ）というものがない。家の歴史は当主から次の後継者へと、秘密の儀式で伝えられるという。なかには、水神の末裔だなどと自称にすぎんと言う者もいるが、なにしろおそろしく古くから存在し、代々の当主に特別な能力があることは公然の秘密、時の有力者への影響力は隠然としている。だから竜門渕家がダメといえばダメなのだ。しかしな」と、千介は言葉を切って、吸飲みから水を飲んだ。

「もし、水を抜いたら、湖底からなにがでてくるのだろう、と夢想する。遠くから来たというこの石は、その辺と関係があるんではないかな」

037.

　竜門渕家ですか……と、ラウレンス博士はつぶやいた。

「あんた、竜門渕のばあさまのところから来たと言わなかったか？」千介は大きな口をゆがめて、にっと笑った。「おれなんかより、あのばあさまの方がおもしろい話が聞けるぞ」

「そういえば、あなたは竜門渕遠野氏より教えを受けられたのだとか」
「読み書きをな。ばあさまはお達者か？」
「ええ」

「ふん。おれより長生きされそうだな。借りたものが多すぎて、まいる。結局、なにも返せんうちにたぶん、おれの方が先に……。
おれはほんの子どもの時、親を亡くして兄弟別々に親戚にもらわれた。

　貧しくてなあ……。朝から晩まで原野を切り開いて畑を作って、乏しい食料を分け合い、着物はつぎはぎだらけで、どれが元の着物かわからんようなものを一年中着て……。そうやって育ててくれた養い親には感謝せねばならんが、なにが切なかったといって、野良で荒らくれやる者に学問はいらん、て考えがな。親が汗水垂らして働かねば生きていけんていうに、学校行きたいて、何事か！　と。学校て、小学校だぞ。

　八つの時にそうやってこっぴどく叱られて家を飛び出し、十日もよその納屋に隠れてたことがあった。十日目に見つかってまたこっぴどく叱られたが、その時に竜門渕先生が……どうも、いっしょになってあちこち捜してくださったらしい……、『そんなに勉強したいならうちへ来い』と言ってくださった。
　おっかない顔したおばさんで、ひょっとして、養い親のもとにいた方がマシじゃねえかと思ったくらいだが、養い親はこれでとうとうやっかいばらいができるみたいなうれしげな顔してるし、おれはしかたなく、こわごわとついて行った。竜門渕の屋敷で下働きをしながら、一から読み書きを教わり、師範学校まで行かせてもらった。その時に出してもらった学費、ついに半分も踏み倒してしもたわ。つごう、十年近くあの家にやっかいになったのだが、あの竜門渕家というのが……あんた、知ってるか？」
「……なにをですか？」
「あの家系には、女しか生まれんのだ」
「……」
「おれは十年ばかり離れに部屋をあてがわれてたが、母屋をのぞくと、これが女ばっかりで！　きれいなのやそうでないのや、小さいのからとしょりまで、まあ、いろんなのが。男はいねえのかと探してみると、女当主の旦那、ひとりだけなんだなあ、おったまげたなあ、あれには」
「……へえええ」

「まあ、十年の間にひとり減りふたり減り、あの世に行ったり、嫁に行ったり、な。先祖の水神てのが女だからなんだそうだが、摩訶不思議な光景であった」
「女性しか生まれない一族ですか……」
「男はひとりも生まれたことがないのだそうだが……なあ……」
「は？」
「水つ早湖の真ん中に、小島があるだろう。あそこに祠がある。あれは蛭子さまだ」
「エビスサマ？」
「ひるこだ」
「？？」

　神的存在から生まれたものの、不具者であった、などの理由で子として認められなかった者を『蛭子』といい、『えびす』とも『ひるこ』とも読む。星名千介はそう説明した。

４・「奇人と呼ばれた男」

５・「小島の祠」へ続く

あとがき

ホシナ　センスケのモデルは保科百助という人です。この人物、湖底遺跡発見の三年後の1911年に43歳で亡くなっています。この短い人生の中で、子どもを教育し、鉱物を採集、標本を作り、私財と私蔵書を投じて図書館（現・長野県立図書館）も作っています。短くも激しく燃え。
『旧石器の狩人』の中で、著者の藤森栄一氏はそうとうこの人に感銘を受けた様子で、かなりのページを割いています。

2024年10月12日

奥付

オリカルクムの記憶
4・奇人と呼ばれた男

2024年10月20日 初版発行

著者　　峯村　明　E-mail
表紙素材　「イラストAC」
　　「素材good」

制作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社